

令和3年度 全県研究大会のまとめと次年度の方角

1 実施報告

(1) 開催地区・実施日・開催校（教科等）・授業者

開催地区・期日	開催校（教科等）・授業者
東北信A：更埴 11/18（木）	○戸倉小（特別活動）塚田 雄祐 教諭 ○五加小（国語）嶋田 まゆみ 教諭 ○戸倉上山田中（総合的な学習の時間）熊谷 修一 教諭
東北信B：中野下高井 11/ 9（火）	○山ノ内東小（外国語活動）宮尾 匠 教諭 ○高社小（社会）藤巻 祐輝 教諭 ○豊田中（数学）金子 智 教諭
中信：安曇野市 11/11（木）	○豊科東小（生活）柳澤 由香 教諭 ○穂高南小（体育）内川 舜也 教諭 ○穂高西中（技術・家庭科：技術）才田 亘 教諭
南信：下伊那 11/16（火）	○上郷小（理科）重盛 美聡 教諭 ○上村小（総合的な学習の時間）清水 あい香 教諭 ○松川中（英語）岡田 直也 教諭 ○鼎中（道徳）矢嶋 俊樹 教諭

(2) 参加人数（延べ人数）

一般：229名 委員・該当校関係者・来賓：392名 信教関係：49名 計670名

(3) 研究推進 研究全般に関わった成果と課題（運営面も含む） *→：委員からの感想

①研究推進（授業者、学校、委員からの意見を中心に）

- ・授業者の自己課題の解決に向けて、学校、研究調査委員が共に研究を進めるという形で取り組んだ。コロナウイルス感染拡大にともなって、事前訪問で、授業公開は行わず、VTRやパワーポイントによる発表ならびに研究討議という形で行うことを確認した。
- ・委員会は従来の参集して行うとともにオンライン会議も行った。次年度からはその割合を増やしたい。また、8月以降コロナウイルス感染レベルが急激にあがったことから、大会をオンラインでの開催も準備した。コロナ禍が続くようであれば、次年度も考えて準備しておく。
- ・次年度から全県研究大会が大きく変わることから、そのための準備を進めていく。授業者や学校ごとに提案されてくる自由度のあるものと、全県研究大会として共通理解を進めていくものとのすりあわせを行っていく。
 - 授業者の自己課題の追究を研究の柱に据え、授業者の試行錯誤する姿を追っていくこと研究の進め方が新鮮であった。形式化と理論化から脱却した研究スタイルを学んだ。
 - 一つの授業の様子を切り取って意見交換するよりは、今回のようにこれまでの授業研究・課題解決に向けて広い視野でじっくりと参会者と討議する形式はよかった。
 - VTRの切り取り方次第で見せ方を変えられてしまうことを考えると、どのようにVTRを編集していくか悩んだ。研究者の視点で切り取られているので参会者の見方が働く余地がなくなった。授業を参観して子どもの姿を基に語り合えるとよい。

②研究会全般に関わって

- ・授業公開ではなく、VTRやパワーポイントなどを用いて発表し、討議の柱を設定して研究会を持つようにした。昨年の1時間の授業をVTRにというものでなく研究のプロセスを示す形とした。新型コロナウイルス感染症への対応も考慮した上での実施であった。
- ・各会場校では、研究のプロセスがより分かりやすいように工夫して発表をしてもらった。特に、現在広く進められているICTを活用して、タブレット端末を一台ずつもって研究会を行うといった、新しいスタイルの研究会も多かった。しかし、実際に準備することは多くの時間がかかり負担が大きかったという意見、やはり1時間の授業を公開して、実際の子どもの姿を基に討議したいという意見もあった。
- ・研究内容は、多岐にわたるが、自己課題を練り上げながら、自分自身の課題解決や子どもの育ちを願って取り組んでいた。何より授業者が何回かの授業を録画して見ることで客観的に自分の授業や研究のプロセスを分析できることがよかった。
 - 継続的にリフレクションを行っていることに驚いた。長期間、記録をつけていくことで授業の方向付けや児童への支援につながっていた。
 - 授業者の「全ては子どもの学びのために」という視点で動画やICTが使われているのが印象的であった。ICTが目的ではなく子どもたちの協働的な学び、最適な学びのためにという視点を大切にしたい。
 - 「理科って楽しい」と感じてほしいという思いとそれを実現するために試行錯誤を大切にするという着目点がよかった。
 - 異学年であってもあれだけ自由に意見の交流ができる子どもの姿から、日々の授業の積み重ねを感じた。成長している自分の姿を子どもたち自身が実感すると、さらにパワーアップした活動を続けてくれると思った。

③その他

- ・参加募集を30名としたが、参加人数にばらつきがあった。参加者および会場校から、もう少し大勢の人数で研究会を持ちたいという意見があった。また、初任者が多いことにもふれ、幅広い年代の先生方に参加してもらうことで、研究会の中身も深まるのではないかという意見もあった。次年度、参加に関わる情報提供を工夫したい。

2 次年度からの全県研究大会について

(1) 大会推進の立場

- ・次年度から、次のように全県研究大会の形を変えていく。
 - 授業者や研究校を公募する。 共同研究者をおく。 自主性独自性を生かす研究とする。

(2) 令和3年度全県研究大会予定

①来年度の授業者・学校の情報 *1/15現在 *開催日調整中

学校・研究者	研究テーマ・ *共同研究者の希望 (検討中も含む)
辰野西小：村澤陽介 小松拓磨	生き生きと学ぶ体育学習を目指して～教材づくり、ICTの活用の視点から～ *信州大学教育学部 教授 岩田 靖
富県小：学校研究	様々な育ちの子どもたちにわかりやすさを与える指導法の工夫 *学習院大学文学部 教授 秋田喜代美

伊那小：田中孝弘	内から育つ～自らの歩みの中で思いをあふれさせていく子ども～ ＊熊本大学教育学部 准教授 苫野一徳
飯田西中：学校研究	教科学習における探究的な学びとその評価 ～デジタルポートフォリオで振り返る学び～ ＊國學院大學人間開発部 教授 田村 学
松川小：学校研究	夢中になって学び続ける子～「やってみよう」から始まる授業をとおして～ ＊埼玉大学教育学部 教授 岩川直樹
屋代中 ：早津 秀 ：小林京介	家庭学習の連携をふまえた授業構成の転換 ＊麻布教育研究所 所長 村澤公胤 1人1台タブレットを活用した単元縦断の授業構成 ＊筑波大学人文社会系 教授 伊藤純郎
中野小：学校研究	子どもが共に創る授業を実現する学校づくり ＊東京大学大学院教育学研究科 教授 小国善弘
裾花小 ：5,6年 OJT 部会	教科担任者制の運営 ＊上智大学総合人間科学部教育学科 教授 奈須正裕
南部小 ：ICT 研究部会	1人1台のタブレット端末を効果的に活用し、個別に支援が必要な子どもへの教師の即時的な支援を支え、子ども同士が友達との考えを交流する授業づくり ＊信州大学教育学部 助教 佐藤和紀
長沼小：小田切洋輔	子どもが意見を練り上げる支援のあり方 ＊同志社女子大学 社会学部 准教授 吉永紀子
篠ノ井西小：村松崇志	体を動かす楽しさ・喜びを感じられる体育授業や学級環境のあり方 ＊信州大学教育学部 教授 岩田 靖
若穂中：学校研究	地域とつながり共に元気になる学校総合 ＊國學院大學人間開発部 教授 杉田 洋
梓川小 ：ICT 活用研究グループ	タブレット活用×思考ツール活用で、友と協働し、主体的に対話しながら学習し、自ら考え動ける子どもを育てる授業のあり方 ＊信州大学学術研究院教育学系 准教授 森下 孟
会田中：藤原賢志	生徒の創造的な学びを目指した数学の授業 ＊都留文科大学教養学部学校教育学科 教授 新井 仁
佐久東中：篠原義光	主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善 ＊文教大学教育学科 教授 永田潤一郎

（３）運営について

①研究調査委員会（これまでの研究大会運営研究調査委員）

- ・各教育会（１５）から１名ずつ、１５名で委員会を構成する。担当する研究会を分担する。
- ・委員会は、年に４回行う。オンライン会議を１回以上持つ。学校での研究会には適時参加とする。大会へは、担当する研究の会場校に参加する。
- ・委員は、全県研究大会の運営全般と研究面での各授業者や研究校の研究への支援を行う。
- ・一般参加者の集計、次年度の授業者と研究校の公募に関わって各教育会で働きかけを行う。
- ・コロナウイルス感染症の拡大が生じたときは、オンラインでの開催などで対応する。基本的には、公開は行うことを前提に考える。

（４）研究推進

- ・個人研究の場合は、自己の研究テーマに基づいて研究を進める。研究面、運営面ともに在籍している学校の教頭や研究主任、教科会などの協力を得ながら進める。同様に学校研究の場合は、各校の研究体制のもとに進める。
- ・従来型の１時間の授業改善ではなく、研究のプロセスを明らかに示しながらの研究にする。また、指導案のスタイルにこだわらず参会者にわかりやすい資料づくりにする。
- ・大会当日は、基本は授業を公開した上での研究会とする。ただし、VTRによる授業公開やICT利用による研究会なども工夫する。

（５）共同研究者の位置づけ

- ・共同研究者は、大学等の研究者や学校の教職員を充てる。共同研究者は、授業者や研究校の研究に共に携わる。学校での研究会、オンラインでの研究会などに参加し研究に関わる。大会当日には、研究会と講演やワークショップなどを受け持つ。「Booklet 信教」へも寄稿してもらう。

（６）当日、参加者などについて

- ・授業公開と授業研究会の時間配分などを考え、半日開催とする。時間帯については、公開校の実情で前にずらすこともあるが、その場合は終了時間を早める。
- ・一般参加者は３０名～５０名程度を予定している。会場校職員はこれに含めない。

（７）全県研究大会の実践報告

- ・「Booklet 信教」に掲載していく。年度内に行われた研究大会の報告は、その年度内１月～３月に掲載する。
- ・内容は、指導案そのままではなく研究のプロセスがわかるようなものとする。できるだけ読みやすい（手に取りやすい）ことを念頭に置いて、写真や文章量などレイアウトを工夫する。
- ・県下の公立小中学校、特別支援学校、義務教育学校、教育関係機関にはこれまでどおり配布する。次年度から、信教HPにも載せていくことも検討している。